

魔法の言葉 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 山崎智仁 所属: 富山大学人間発達科学部附属特別支援学校 記録日: 2018 年 2 月 21 日

キーワード: 知的障害、自閉症、生活支援、余暇支援、家庭支援

【対象児の情報】

○学年

知的障害特別支援学校 小学部 5 年生

○障害名

知的障がいを伴う自閉症

○障害と困難の内容

【児童の実態】

- ・ 田中ビネー式知能検査 V (4 回に分けて実施): I Q 2 8 (H 2 8 年 1 0 月実施)
- ・ K I D S 乳幼児発達スケール: 総合発達年齢 2 歳 6 か月 (4 月実施当初)
※本来は就学前児用のものであるが、本実践では個人内での発達の様相と伸びを把握するために使用
- ・ 本人からあまり発語はないが、簡単な単語を話すことができる。
- ・ 見通しが持てない、自分の気持ちがおおらないと泣き叫ぶ、物を投げる、排尿するなどの不適応行動を行う。
- ・ 対象児、父親、母親、兄の 4 人家族。父親を怖い存在だと認識しており、父親が近くにいると泣き叫ぶ。
- ・ 自分で決めた時間にしか排泄をしない。(それ以外の時間は、したくても我慢をする)
- ・ 他者に身の周りの物を触られると初めからやり直す。(例えば、ランドセルを触られるとロッカーに入っていたところからやり直す)

【活動目的】

○当初のねらい

- ・ 家庭や外出先で見通しが持てなかったり、自分の気持ちを通らなかったりすると大きな声で泣き叫ぶ、物を投げるなどの不適応行動を起こす児童に、見通しを持ち、適切に余暇の要求などができることで落ち着いて過ごすことができるように支援を行う。
- ・ 父親との楽しい時間を過ごすことで、父親への恐怖感を無くし、父親との関係改善を図る。

(夏休み中に家庭にて連日不適応行動を起こしたことからねらいを追加)

- ・ 余暇活動の種類が増えるように支援を行う。
- ・ 家族のストレス(特に母親)が解消するように、SNS を使って相談に乗ったり、必要に応じて懇談を行い児童への支援の方法を伝えたりすることで家族のストレス減少を図る。

・実施期間

2 0 1 7 年 4 月～2 月 (継続中)

・実施者

山崎智仁

・実施者と対象児の関係

学級担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・他者に自分の思いが伝わらない、やりたいことがあるのに分かってもらえないときなどは怒って泣き叫び、自分の思いを伝えようとする。
- ・見通しが持てない不安な気持ちや不満、不快な気持ちなどを床を蹴りながら泣き叫んだり（「お父さん」「痛いよ」「浣腸」など本児にとってネガティブな単語を叫ぶ）、失禁や脱衣をしたりして表現する。



対象児が泣き叫ぶ様子

※上記の２点に関して、昨年度まで学校でも見られる姿だったが、今年度になり対象児の好きな玩具を複数提示して選択できるようにしたり、気持ちを代弁したりすることですぐに落ち着いて過ごすことができるようになった。

- ・本児が便秘のときに浣腸を行う際、嫌がる本児の体を抑える役目をすることから本児にとって怖い存在だと認識されている。そのため、父親が学校に来ると聞いたり、休日に家に父親がいると分かっただけで泣き叫んで拒否感を表す。父親は本児に関わりたいが、不安になることを恐れて本児との関りを避けている。
- ・「YouTube」が好きで、保護者にスマートフォンやタブレット PC を「電話」と言って要求する。自分で検索をすることができないが、サムネイルから見たい動画を探すことはできる。しかし見つからなかったり削除されていたりすると泣き叫んだり、デバイスを投げ捨てたりする。また、大きな声でキャラクターが叫ぶ、好きなキャラクターがリビングなど不適切な場所で排泄を行うといった動画を好む傾向があり、それを模倣してか、病院で大きな声を出したり、自宅のリビングで排泄したりする。
- ・夏季休業中に家庭で過ごす時間が多く、家庭で行える余暇活動に飽きたため、保護者に新しい余暇活動を要求し、自分の思いが伝わらないと何時間も泣き叫び続けることがあった。

＜夏休み中のエピソード（母との懇談より聞き取り）＞

対象児が母親に「カニ飯（を食べたい）。」と言うため、近くのスーパーに買い物へ行く。しかし、スーパーに着くと車から降りようとせず、母親がカニ飯のことを尋ねると「お家（に帰る）。」と言うため、そのまま帰宅する。自宅に着くと母親に「カニ飯（を食べたい）。」と言うため、再度近くのスーパーへ買い物に行く。しかし、スーパーに着くとやはり車から降りようとせず、母親がカニ飯のことを再度尋ねると「お家（に帰る）。」と言うため、そのまま帰宅。自宅に着くとまた母親に「カニ飯（を食べたい）。」と伝え、もうスーパーに行けないと伝えると何時間も泣き叫び続けた。

- ・児童の日々の不適応行動、余暇要求のエスカレート、その対応策として行った服薬の増加への罪悪感などから家族（特に母親）が疲弊している様子が見られる。

PSIパーセンタイル表

	得点	平均	1	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75	80	85	90	95	99	
総点	229	190.8	119	142	153	161	165	170	174	179	184	187	190	193	198	202	207	211	215	221	228	240	265	
子どもの側面	122	85.7	49	61	66	70	74	76	78	80	82	84	86	88	89	91	93	95	98	101	105	111	122	
C1 親を喜ばせる反応が少ない	18	12.8			8		9		10		11		12	13		14		15	16		17	19	20	
C2 子どもの機嫌の悪さ	25	16.9	9	11	12		13		14		15	16		17		18	19		20	21	22	24	28	
C3 子どもが期待どおりにいかない	12	10.3		5	6	7		8		9			10			11		12	13		14	15	18	
C4 子どもの気が散りやすい/多動	21	15.4	8	10	11	12		13		14			15		16		17		18	19	20	21	23	
C5 親につきまとう/人に慣れにくい	21	12.6	5	7		9		10		11		12			13		14		15	16	18	21		
C6 子どもに問題を感じる	11	8.8		4	5		6		7			8			9		10		11		12	14	16	
C7 刺激に敏感/ものに慣れにくい	14	9.4	4	5	6	7			8				9			10			11	12		14	16	
親の側面	107	105.1	64	76	82	86	90	92	95	98	100	103	105	107	109	112	114	117	121	124	129	137	150	
P1 親役割によって生じる規制	22	22	8	14	15	17		18	19	20		21	22		23	24		25	26	27	28	31	34	
P2 社会的孤立	14	16.8	7	9	11	12	13		14		15	16		17		18	19	20	21	22	23	24	29	
P3 夫との関係	14	12.3		5	6	8	9			10		11	12		13		14		15	16	17	18	20	23
P4 親としての有能さ	20	21.1	13	16	17		18		19		20			21		22		23		24	25	27	30	
P5 抑うつ・罪悪感	9	10.2	4	5	7			8			9		10			11		12		13	14	15	18	
P6 退院後の気落ち	16	9.1	4		5		6		7			8			9	10		11	12	13	14	15	18	
P7 子どもに愛着を感じにくい	7	6.9		3	4		5					6			7			8		9		10	12	
P8 親の健康状態	5	7.1	3		4			5				6			7		8		9	10		11	13	

Parenting Stress Indexの結果（6月実施）

母親に Parenting Stress Index: PSI（育児ストレスインデックス）を実施した。アンケートの結果、「子供の側面によるストレス」が非常に高い結果が出た。特に、「人に慣れにくい」、「刺激に敏感」といった療育や訓練では改善が望みにくい障害特性に起因するような下位項目が高いことが分かり、対象児を育てることに直接起因するストレスが日々かかっていることからストレス・ケアの必要性があると考えられた。

○活動の具体的内容

① やりたい余暇活動を正しく相手に伝えるための表出手段を獲得する。

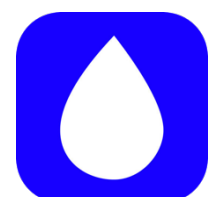
発語が苦手でも指差しなどで正しく簡単に伝えられる支援ツールが必要だと考え、対象児が家庭において、家族にやりたい余暇活動を相手に正しく伝えることができるように「ご褒美シート」を作成した。「ご褒美シート」には、対象児が好きな余暇活動の一覧が載っており、シートの中からやりたい余暇活動を選んで伝えてもらうようにした。



ご褒美シート

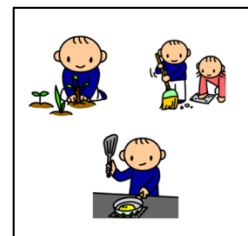
② 日々の生活に見通しが持てるようにする手段を獲得する。

確認することで見通しを持って落ち着くことができる支援ツールが必要だと考え、家庭や学校にて共通の予定表を使用することにした。それまでも予定表は使用していたが、家庭と学校はもちろん、学校内でも使用しているシンボルが異なっていたため、対象児に関わるシンボルを全て共通のものとした。シンボルはシンプルで分かりやすい「ドロップス」を使用した。また、ドロップスには無かったシンボルはAACアプリの「DropTalk HD」のシンボル作成機能を使って作成した。予定表を使用するにあたり、先に学校にて予定表を使って見



「DropTalk HD」

通し持つ練習を行った。作成した予定表は二列になっており、一日の流れは左側の列を確認することで分かるようになっている。右側の列はその活動を行うとできること、例えば排泄をすると「ご褒美ブック」にて余暇活動ができることが提示してあったり、その活動の中で守って欲しい約束カードを貼ることで約束を確認できたりするように作成した。



作成したシンボル



予定表

③ 父親と関係改善を図る。

父親との関係改善を図るために、7月に父親と懇談を行い、対象児への支援方法について話し合った。父親の「怖い」というイメージを払拭するために、父親と楽しく過ごす経験を増やしていくことが必要なことを伝えた。そのため以下の二点を父親にお願いした。

- 【1】 家庭にて父親は対象児の手伝い活動に対して、賞賛したりご褒美を渡したりする役目となる。(対象児の不応答行動への注意は母親の役割とする)
- 【2】 週に1回、5分程度父親と一緒に楽しく時間を設ける。(慣れてきたら関わり合う回数や時間を増やしていく)

懇談を通して、対象児と週に1回「YouTube Kids」を5分程度見て過ごす時間を設けてもらうことにした。(過激な動画が多い「YouTube」は家庭で極力対象児に見せないように父親、母親にお願いした。)



「YouTube Kids」

④ 必要に応じて相談をしたり、支援を頼んだりすることで落ち着いて過ごすことができる。(母親)

対象児と父親の関係があまりうまくいってなかったことから、家庭で対象児に支援を行うのは母親である。しかし、食事の用意や掃除などの家事もあることから、困ったときにすぐにどのように支援をすべきか相談することが難しい現実があった。そこでSNSアプリ「By Talk for School」を使って時間があるときに気軽に担任に相談できるようにした。また、依存や共依存などのリスクを廃し、教諭としてのコンプライアンスを担保するために、「臨床心理士倫理綱領」の具体的には第5条を遵守するように心がけた。



「By Talk for School」

また、緊急の際には電話連絡や懇談を行い、対象児への支援方法や地域の関係機関の紹介を行うことにした。

○対象児の事後の変化

① やりたい余暇活動を正しく相手に伝えることができたようになった。

「ご褒美シート」は学校にて6月1日から使用を始め、家庭においては6月31日から使用を始めた。学校にて、「ご褒美シート」の使い方を学習し、教師にやりたい活動を伝えることができたようになったため、母親と懇談を行い、対象児が「ご褒美シート」を使っている様子を映した動画を提示しながら具体的な使い方の説明を行った。iPadにて、日常の中で対象児が「ご褒美シート」を使っている様子を撮影しておいたため、母親は動画を見ることですぐに「ご褒美シート」の使い方を理解することができた。そして家庭においても「ご褒美シート」を使い始め、シートを使ってタブレット PC や DVD などを要求することができるようになった。

しかし、夏季休業中に対象児がシートの中にある活動に飽きてしまい、シート以外の余暇活動を要求するようになった。そして保護者がその要求に応えたことから児童の対象児の要求がエスカレートすることになったため、シートの使用を中止し、新たに「ご褒美ブック」を作成した。

「ご褒美ブック」は余暇活動が1ページ毎に分かれており、取り外すことができるように作成した。余暇活動のページは、カード（対象児の好きなイラストカード）、本、DVD などを作成した。これらのページを学校、家庭の状況に合わせて増やしたり抜いたりすることで「ご褒美シート」のようにいつも同じ余暇活動ばかりで対象児が飽きてしまわないようにすることをねらった。そして余暇活動は「ご褒美ブック」の中から必ず選んでもらうようにした。（対象児が家庭にて無理な余暇活動の要求を行わないようにするため）「ご褒美ブック」は学校では8月31日、家庭では9月6日から使用を始めた。学校にて、「ご褒美ブック」の使い方を学習するとすぐに教師にブックを使ってやりたい活動を伝えることができたようになったため、母親と懇談を行い、対象児が「ご褒美ブック」を使っている様子を映した動画を提示しながら具体的な使い方の説明を行った。そして家庭では、始めのうちは「ご褒美ブック」を使わずに他の無理な活動を要求する姿が見られたが、母親が「ご褒美ブック」の中から選ぶ様に伝えたことですぐに「テレビ」「DVD」などを保護者に要求することができるようになり、無理な要求を行うことがなくなった。また、対象児の将来を見据え、余暇活動を要求する際には言葉でやりたい活動を言ってもらうことにした。始めは、「これ。」と伝えていた対象児も「○をください。」「○したいな」と相手に伝えることができた様になった。



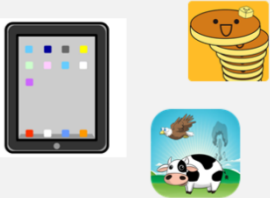
ご褒美シートを使う様子



ご褒美ブック



ご褒美ブックを使う様子

タブレット 	DVD 	カード 	ほん 
・記録されている動画を鑑賞する ・記録されている音楽を聴く ・ゲームアプリで遊ぶ	・好きな DVD を選んで観る	・キャラクターが描かれた好きなカードを選んで観る	・絵本を見る ・好きなキャラクターの本を見る ・児童書を見る
おもちゃ 	テレビ 	スーパー 	こうえん 
・感覚系の玩具で遊ぶ	・主に教育テレビの番組を見る	・ご飯を買いに行く ・お菓子を買いに行く ・調理の材料を買いに行く	・公園で遊ぶ

② 日々の生活に見通しが持てるように

予定表を全て共通のシンボルにしたことで、家庭で母親から事前に聞いていた説明と登校時に担任から聞く説明が一致し、以前に増してより落ち着いて朝の準備や着替えに取り組むことができるようになった。学校で予定表を使用しているうちに1日の見通しもより持てるようになり、苦手な活動のカードが貼ってあると担任に「〇〇嫌なの。」と伝えることができるようになった。担任が「分かったよ。じゃあ3回だけしようね。」などと具体的な回数を伝えると安心して次の活動に取り組めるようになった。家庭でも予定表や同じシンボルを使ったカレンダーを使い、母親が予定を伝えると「〇〇嫌なの。」と気持ちを伝えるようになり、その気持ちを受容することで泣き叫ぶ姿は見られなくなっていった。対象児の苦手な受診（予防接種）



活動が終わり、カードを取り外す様子

の際も家庭で母親に説明をしてもらい、下校時に担任からもう1度同じ説明を行うことで不安になりながらも、落ち着いて予防接種を受けることができた。

③ 父親との関係改善を図るために

対象児と週に1回「YouTube Kids」を5分程度見て過ごす時間を設けてもらったことで、対象児は父親と一緒に落ち着いて過ごすことができるようになった。対象児の余暇活動は一人で完結する活動を好む傾向（一人でカードを眺める、一人でTVを見る）があるが、「YouTube Kids」を利用する場合は父親に好きな動画を検索してもらう必要があり、必然的に父親と共同して活動する場面が生まれるため、関係改善を図る上で非常に有効であった。そして「YouTube Kids」を通して父親と関わるができるようになってきたことで、学校のPTA活動に対象児は父親と一緒に参加できるようになった。



父親と YouTube Kids を見て過ごす様子



父親とボウリングをする様子

しかし、夏季休業中に対象児から馴染みのあるスーパーと自宅の往復ドライブを何度も要求してくるといった無理な余暇活動の要求が行われるようになったり、病院の待ち時間に過激な動画が見たいと「YouTube」を母親に要求し、大音量で音を流す、止めると怒るといった姿が見られたりするようになったため、母親と相談し

「YouTube」「YouTube Kids」を余暇活動から消去することにした。（詳細については④参照）その代わりに簡単なゲームアプリで5分程度、父親と遊ぶことができるように、学校にて簡単なゲームアプリで遊ぶ練習を行った。使用したアプリは「爆破スイッチ1／16」「パンケーキタワー」の2つである。学校では練習当初、なかなかゲームをしようとはしなかったが、友達がゲームで遊んでいる姿を見て興味を持ったようで友達や教師と一緒に遊ぶことができるようになった。特に「パンケーキタワー」は休み時間にやりたいと要求する程にお気に入りのゲームになった。しかし、家庭にタブレットPCを持ち帰り、父親と余暇活動としてやってもらおうとしたが、一人でゲームをしたかったようで父親と一緒にに行くことはできなかった。代わりに、デイサービス先にて抱っこや肩車といった触れ合い遊びをしてもらうことが好きになったようで、父親との関係が改善されてきたためか、帰宅すると父親に抱っこや肩車を要求する姿が見られるようになった。



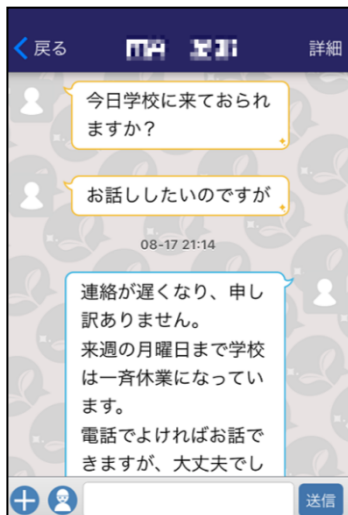
「爆破スイッチ1／16」で遊ぶ様子



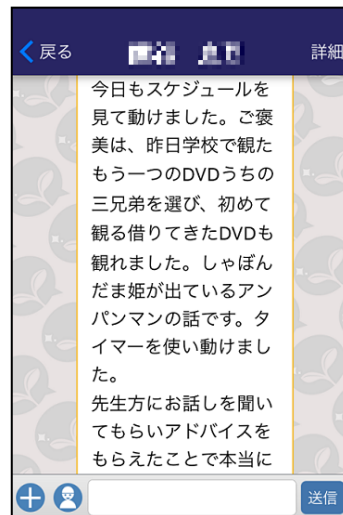
「パンケーキタワー」で遊ぶ様子

⑤ 対象児について必要に応じて相談をしたり、支援を頼んだりすることで落ち着いて過ごすことができる。(母親)

母親は困ったときや支援がうまくいったときに「By Talk for School」を使って連絡を行うようになった。担任からも、児童が上手にできた活動のことや偏食がある対象児が食べることができた物の写真などを送り、母親に情報提供をした。母親からは時間があるときに気軽に相談できて助かるという言葉が聞かれた。

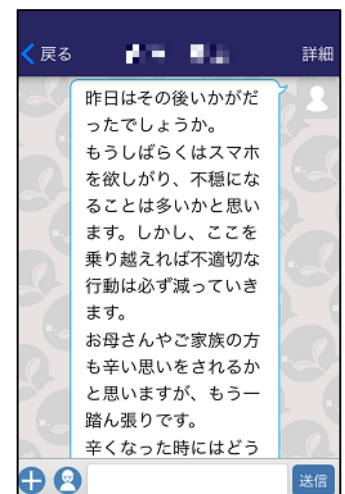


困ったとき



支援がうまく
いったとき

また、急遽対象児への支援が必要なときには電話、懇談などを母親と行った。懇談では対象児への具体的な支援方法やペアレントトレーニングの技法を伝えること、今後のデイサービス、ショートステイの利用について相談することを目的に母親を現在まで計11回実施した。また、夏季休業を終えて「YouTube」を消去する際には、1週間程度激しく泣き叫ぶ、物を投げるなどの不適応行動の増加が見られた。夏季休業中の対象児の様子が思い出され、保護者からは本当にこれで大丈夫なのか、このまま不適応行動が収まらないのではないかと不安に思う様子も見られた。困ったとき、話をしたいときには学校に電話をして欲しいと伝えたことでほぼ連日電話がかかってきたが、対処方法と励ましの言葉を伝えて母親に頑張ってもらった。休日にはSNSにて対応の仕方について文章にて説明を行ったり、励ましの言葉を送ったりすることで対象児の不適応行動を伴った要求に応えないように保護者の支援を行った。その結果、対象児は「YouTube」を要求することは無くなり、



不適応増加時のやりとりの一部

落ち着いて「ご褒美ブック」の中から余暇活動を選び、楽しく過ごす姿が見られるようになった。保護者からは対象児が「YouTube」で見ている動画が対象児に適切なものか不適切なものかのチェックをしたり、動画が無いと泣き叫んだりすることが無くなったと喜ぶ声が聞かれた。

夏季休業中に対象児が不安定になったことで、母親は冬季休業中にまた不安定になるのではないかと不安になる様子が見られた。そこで12月に母親、対象児の相談員、デイサービスの職員2名、本校小学部主事、担任にてケース会議を行った。ケース会議では、冬季休業中のデイサービスの過ごし方について、家庭で落ち着いて過ごすための支援についてなどを話し合った。会議では対象児の学校での様子や担任から実際に支援を受けている姿を動画で見ってもらうことで、対象児がどんなことができるのか、どのように支援をすれば良いのかの共通理解をすることができた。また、対象児が学校の活動が好きでそのリズムを崩したくないという母親の話を聞いて、学校で行っている朝の活動や支援ツールを家庭に持ち帰ることにした。その結果、冬季休業中は不安定になることもほとんどなく、楽しく落ち着いて過ごすことができた。

<冬季休業中について(母との懇談より聞き取り)>

対象児が昼食に食べるカニ飯を探しにスーパーに行ったが、売っておらず3～4店舗探すことになった。対象児は途中で鼻息を荒くして怒りそうになったが「売ってないから仕方ないんだよ。」と伝えると我慢してカニ飯を売っているスーパーを探すことができた。

(担任から、自信をもって対象児に関わっていることが良かったのではないかと言われて)

自信はもててはないが、学校の支援ツールがあって対象児は落ち着いていたので少し怒っていても(仕方ない)言いやすかった。

保護者は対象児への支援について自信はないと言うが、以前に比べて対象児への支援方法について相談を行う機会も減ってきており、自信をもって対象児への支援にあたっている母親の姿が見られるようになった。

○報告者の気づきとエビデンス

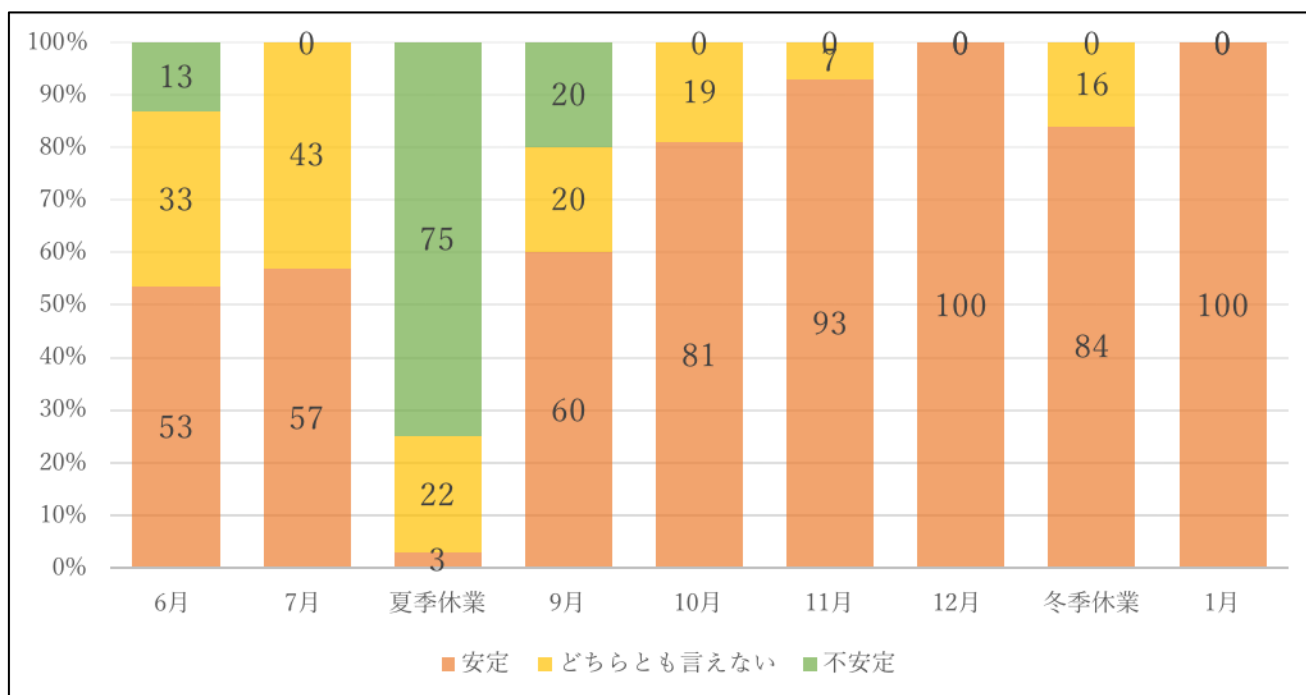
(1)対象児の家庭での様子について

・主観的気づき1

10月以降、対象児は家庭にて大きく不安定になることは少なくなった。家庭にてやりたいことが相手に正しく伝わる、見通しを持って過ごせる、父親との関係が良くなったことなどで対象児は伝わらないもどかしさ、何が起きるか分からない不安さ、父親に何かされるのではないかとという恐怖から多少は解放され、落ち着くことができるようになったのではないだろうか。

・エビデンス

6月1日から連絡帳に対象児の家庭の様子を3段階評価してもらう欄を作成し、母親に毎日評価をしてもらった。夏休み中の様子については母親から「あまりにも辛い体験だったため、思い出したくない」と申し出があったため、詳しい評価は不明である。保護者と懇談をした際に「10日間ほどは普段通りだったが、残りはずっと対象児が泣いて暴れていた」との発言や懇談時に聞いたエピソードなどから推測で数値の記入を行っている。



母親による対象児の家庭での様子の評価

グラフから、10月以降大きく不安定になっている姿は見られていない。このことから、対象児は家庭にて落ち着いて過ごすことができるようになってきていることが分かる

(2)対象児の言語の増加、言語の理解について

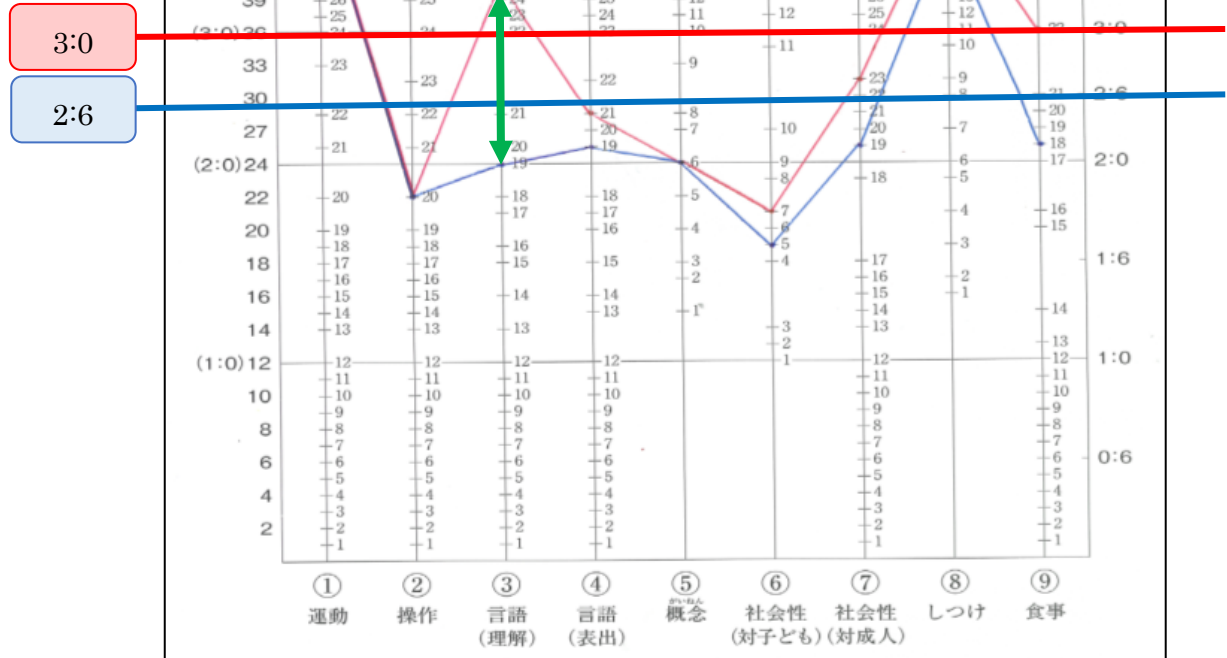
・主観的気づき 2

やりたい余暇活動を「ご褒美ブック」と言葉にて相手に伝えてきたこと、イラストと文字が書かれた予定表を毎日確認したことが要因となっただけで、対象児の話す単語の数の増加、また家族や担任などの話す内容が以前より理解できている姿が見られた。

・エビデンス

主観的な気づきから4月に実施したKIDS乳幼児発達スケールを12月に再実施した結果、全体的な伸びはあまり見られなかったが、言語（理解）に関しては大幅な伸びが見られた。対象児が落ち着いて過ごすことができたようになった要因には言語の理解が進み、周囲の支援者に言語で伝えられる、支援者の話が分かるということもあるのではないかと考えられる。

KIDS乳幼児発達スケール
4月実施（青）と
12月実施（赤）の比較



KIDS乳幼児発達スケール（4月）と（12月）の比較

（3）母親の育児ストレスについて

・主観的な気づき 3

以前までは対象児の些細な様子の変化にも不安を見せる母親の姿が見られたが、対象児が日々落ち着いていること、対象児と父親との関係が改善したこともあってか、笑顔がよく見られるようになった。また、それに伴い以前まで「By Talk for School」や電話にて支援方法について相談の連絡がよくあったが、そういった相談の回数もかなり減少した。対象児が落ち着いて過ごすことができるようになったことで、母親も落ち着けるようになり育児へのストレスが減少したのではないかと。

・エビデンス

主観的な気づきから、6月に実施したParenting Stress Index: PSI（育児ストレスインデックス）を再度11月に母親にお願いした。その結果、母親の育児ストレスが減少していることが分かった。ストレスの総点や子どもの側面、親の側面のストレスといった上位項目を除き、大きくストレスが減少している下位項目は3点あった。1点目は「子どもの機嫌の悪さ」であった。これは対象児が家庭にて落ち着いて過ごすことができるようになったことがストレス減少の大きな要因と考えられる。2点目は「親役割によって生じる規制」であった。対象児と父親の関係が改善したことで母親にかかっていた責任が減ったこと、SNSを使って担任に気軽に相談できること、関係機関と様々な相談ができるようになったことなどがストレス減少の大きな要因と考えられる。3点目は「退院後の気持ち」であった。この項目が減少した要因は、はっきりと分からず、推測であるが本児が家庭で落ち着いたことで張り詰めた気持ちが解け、退院時の気持ちを前向きに捉え直すことができたのではないかと考え

た。反対にストレスが増加した下位項目が1点あった。「親の健康状態」である。この項目のストレスが増加した原因もはっきりと分らないが、以前までは自身の健康状態を考える暇がなかったが、本児が家庭で落ち着いたことで張り詰めた気持ちが解け、自身の健康状態について正確に捉え直すことができるようになったのではないかと推測した。これらの結果から、母親の育児ストレスは全体的に減少し、以前に比べて落ち着いて過ごすことができるようになったと考えられる。

Parenting Stress Index
6月実施（青）と
11月実施（赤）の比較

PSIパーセンタイル表

	得点	平均	1	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75	80	85	90	95	99
総点		190.8	119	142	153	161	165	170	174	179	184	187	190	193	198	202	207	211	215	221	228	240	265
子どもの側面		85.7	49	61	66	70	74	76	78	80	82	84	86	88	89	91	93	95	98	101	105	111	122
C1 親を喜ばせる反応が少ない	12.8			8		9		10		11		12	13		14		15	16		17	19	22	
C2 子どもの機嫌の悪さ	16.9	9	11	12		13		14		15	16		17		18	19	20	21		22	24	28	
C3 子どもが期待どおりにいかない	10.3		5	6	7		8		9		10		11		12		13		14	15	18		
C4 子どもが気が散りやすい／多動	15.4	8	10	11	12		13		14		15		16		17		18	19	20	21	23		
C5 親につきまとう／人に慣れにくい	12.6	5	7		9		10		11		12		13		14		15		16	18	21		
C6 子どもに問題を感じる	8.8		4	5		6		7		8		9		10		11		12	14	16			
C7 刺激に敏感／ものに慣れにくい	9.4	4	5	6	7		8		9		10		11		12		13	14	15	16			
親の側面		105.1	64	76	82	86	90	92	95	98	100	103	105	107	109	112	114	117	121	124	129	137	150
P1 親役割によって生じる規制	22	8	14	15	17	18	19	20	21	22		23	24		25	26	27	28	31	34			
P2 社会的孤立	16.8	7	9	11	12	13		14		15	16		17		18	19	20	21	22	23	24	29	
P3 夫との関係	12.3		5	6	8	9		10		11	12		13		14		15	16	17	18	20	23	
P4 親としての有能さ	21.1	13	16	17		18		19		20		21		22		23		24	25	27	30		
P5 抑うつ・罪悪感	10.2	4	5	7		8		9		10		11		12		13		14	15	18			
P6 退院後の気落ち	9.1	4		5		6		7		8		9		10		11		12	13	14	15	18	
P7 子どもに愛着を感じにくい	6.9		3	4		5		6		7		8		9		10		11	12	13	14	15	
P8 親の健康状態	7.1	3		4		5		6		7		8		9		10		11	12	13	14	15	

Parenting Stress Index（6月）と（11月）の比較

○今後に向けて

以前に比べて対象児は家庭において好きな余暇活動の種類も増え、楽しく落ち着いて過ごすことができるようになってきた。見通しが持てるようになったことで、母親に行きたいデイサービスを伝えたり、会いたい友達の名前を話したりする姿も見られるようになった。当日行く予定のデイサービスが自分の希望と違っていても、次にそのデイサービス先に行く日を教えてもらうことで怒らずに我慢することもできるようになってきた。学校においても以前まではお腹が空くと泣きながら怒り、担任から「お腹が空いたんだね。」と気持ちを代弁してもらうことで落ち着いていたが、3学期に入り、自分から担任に泣かずに「お腹空いたの。」と伝えることができるようになってきた。今後は彼女が気持ちを周囲に伝えて良い結果が生まれた経験をより増やして行くことで、好きな活動を相手に伝えるだけでなく、自分の様々な思いを伝えられるように支援していくことが必要だと思われる。また、余暇活動の種類に関してはまだまだ少なく、一人でやる活動が多い。今後も落ち着いて一人でやる余暇活動の種類を増やしていくとともに、対人との関わりは触れ合い遊びが多く、成長期もあって対象児の体がどんどん大きくなってきていることから触れ合い遊び以外の対人の余暇活動も増やしていきたい。

母親のストレスに関しては、以前に比べて減少したもののまだまだ高い状態である。対象児は家庭で落ち着いてはきているが、対象児がもつ対人の苦手さ、過敏性などは急に無くなるものではない。そのため、今後もある程度のストレスは母親にかかってくると思われる。現在母親は非常に自信をもって対象児に接しているように思われる。今後は、母親に以前の自分と今の自分の違いを認識してもらい、何があっても大丈夫と思えるように対象児との関わり方に関する自己効力感が高まるように支援をしていきたいと考えている。